

東魏・北齊朝の西域人
——西域帰化人研究 その4——

後 藤 勝

**The Emigrants from Hsi-yü (西域) in
the Tung-wei (東魏) and Pei-ch'i (北齊) Period**

Masaru Goto

Summary

In the Pei-wei (北魏) Period, emigrants from Central Asia played the most active parts in commercial trade with China. In particular, many Sogdians who migrated and settled there, were more important than any other people.

After Pei-wei was split in half in 534 A.D, the direct trade between Tung-wei (東魏), Pei-ch'i (北齊) and Central Asian countries were interrupted by Hsi-wei (西魏) and Pei-chou (北周). Therefore, Tung-wei and Pei-ch'i began the direct trade with them on a new route via Jou-jan (柔然), by the mediation of T'u-yü-hun (吐谷渾) in the Tung-wei Period, and by that of T'u-chüeh (突厥) in the Pei-ch'i Period.

Especially during the reign of Hou-chu (後主: 565~576), the activities of Sogdians became the most remarkable in various worlds, because he was a famous Hsi-yü (西域)-maniac. They exercised their authorities by making use of their positions of his favorite subjects, or acted as his special merchants or as usurers among the people.

Received Jan. 31, 1990

Key-words : Sogdian

Silkroad

T'u-yü-hun (吐谷渾)

T'u-chüeh (突厥)

は し が き

南北朝時代に中国に來住した西域人については、古く桑原隲藏氏をはじめとして諸先学の研究がある。いま、その中から、個人名の明らかなもののみ(但し仏僧を除く)摘出すると28人に及び、その中、北齊時代に属するものは16人である。南北朝140年の中、北齊はわずかに28年に過ぎないので、い

かにこの時代に集中して彼等の活動が顕著であったかが知れよう。

しかるに、北齊書本紀について西域諸国の遣使奉獻の記事を捜すと意外にも皆無である。遣使奉獻なくして西域人の活動が最も多く見られるのは、どのような理由によるものか。

ついで彼等の北齊朝における活動であるが、その具体相については必ずしも詳かではない。そこで北齊書及び北史等を精査してみるに、従来あまり触れられなかった点、特に政治及び経済面について、僅かであるが新しい史料を見出しえたので、それらに基づき活動の諸相を追及したい。

一 西魏・北齊時代における西域人の来住

1 東魏と吐谷渾

この問題を解明するためには、少しく遡って吐谷渾と東魏・北齊との関係に注意しなければならない。

吐谷渾が東西交易の仲継者として、5世紀から7世紀に及ぶ間の東アジアの国際関係の上に、極めて重要な役割を演じたこと、その間北魏に対する遣使朝貢はその回数において他の諸国を断然抜いて多く、正史の帝紀だけでも実に64回に達していることは、つとに松田寿男が雄篇「吐谷渾遣使考」において明らかにされたところである。

ところで北魏は534年に東西両魏に分裂し、やがて東魏は550年に北齊となり、西魏は557年に北周となるのであるが、東魏・北齊と吐谷渾との関係はどのように推移したのであろうか。魏書卷101西域伝吐谷渾の条に

興和中(539~543)、齊獻武王、相と作る。荒遠を招懷し、蠕蠕既に国に附し、夸呂使を遣わして敬を致す。獻武王、諭すに大義を以てし、其の朝貢を徴す。夸呂乃ち使人趙吐骨眞をして道を蠕蠕に假りて頻りに来らしむ。

即ち東西に分裂したため、西魏によって東魏との交流が阻隔されてからも、吐谷渾の交易に対する積極的な姿勢は少しも衰えず、モンゴル高原の蠕蠕の領内を経由する大迂回路を新しく開拓して、通商を継続していたのである。そして東魏の実権者高歡もこれを受けて朝貢を歓迎したので、吐谷渾主夸呂は引続き数回の朝貢を重ねた。のみならず、夸呂は従妹を入内させることを申入れ、孝静帝またこの申出を容れて「嬪」として迎え入れた(545)。容華嬪である⁽²⁾。続いて東魏からは、済南王匡孫の女を広楽公主として夸呂の許に送って、友好関係をより一層強固なものとした。

このような友好関係のもとに吐谷渾の遣使朝獻は続けられ、やがて北齊時代へと移行する。この間の推移を魏書卷12孝静帝紀及び北齊書卷1神武帝紀によって辿ってみると、興和4年(542)、武定元年(543)、同2年(544)、同3年(545)、同6年(548)、同7年(549)は2回、天保元年(550)、同4年(553)⁽³⁾、と12年間に実に9回にも及び、この時期の通商往来がいかに盛んであったかが伺われる。

それではこの時期の通商の実態はどのようなものであったか。ほんの少しく年次は降るが、北史卷96西域伝吐谷渾の条に、廢帝2年(553)のこととして、

是の歳、夸呂又使を齊に通ず。涼州刺史史寧其の還るを覘い知り、之を州西の赤泉に襲い、其の僕謝乞伏觸版・將軍翟潘密・商胡二百四十人、駝騾六百頭を獲、雜綵・絲絹は萬を以て計る。

とある。この事件は北周書卷28史寧伝にも見えるが、記述は極めて簡略で、その上年次も廢帝3年(554)としている。それはともかく、松田寿男氏は、この一文を吐谷渾の通商活動を知る上において稀有の史料として格別に重視し、次のように述べておられる⁽⁴⁾。

史寧が涼州の西方で捕虜とした吐谷渾の使者一行は、僕射・將軍の如き吐谷渾の重臣に引率せられていたと認められる。しかし一行中に少くとも240人を算えた商胡が加わっていた点や、萬を以て計る程の絹が一行によって運ばれつつあった点は、東西陸路の貿易上における吐谷渾の役割をあまりにも明瞭に告げるものといわざるを得ないであろう。何となれば、前者は吐谷渾の手引によってその一行に伍し北齊に赴いて交易を営んだ西域の商胡であり、後者は一行が北齊から齎らし来った主要商品に違いないからである。

要点はこれに尽くされているが、本論の趣旨にそうて補足すれば——240人余の商胡は勿論吐谷渾人も含まれると思うが、大部分は西域諸国から東来した商人集団がいくつも含まれた混成部隊であったに違いない。このように考えると、当時東魏は、吐谷渾を窓口として西域諸国と通商関係をもっていたことになるし、西域商人は、専ら吐谷渾の被護と導訳によって北周の妨害を避けながら、前代に引続き洛陽への道を、新しく都となった鄴まで延長して通商していたといわねばならない。そしてかつては万余家を数えた⁽⁵⁾という洛陽の西域胡人たちの大部分もその活動の根拠地を鄴に移し終えていたに違いない⁽⁶⁾。

以上により、序説において提示した疑問——西域諸国の遣使朝貢の記録が皆無でありながら、西魏・北齊朝における胡人の活動が目立つという一見矛盾する印象——もいささか理解できるであろう。

2 西魏・北周の発展と北齊・吐谷渾関係

それでは、北齊時代にはいつてからも両国の友好関係—さかんな通商は続いたのだろうか、この点につき次に述べることにしたい。

北齊書本紀及び周書吐谷渾伝を通検するに遣使朝貢はわずかに560年の1回のみである。これは何故か。それには、北齊朝誕生後における西魏・北周と吐谷渾との関係を追跡する必要がある。以下北周滅亡に至る30年間の両国関係を概観することとする。

吐谷渾の北齊への度重なる遣使朝貢は、勿論西魏の歓迎するところではなく、常に監視の目を光らせていたに違いない。しかし、東魏や蠕蠕との緊張関係もあって使節団(隊商)の捕捉は極めて困難であったはずである。捕捉に成功した記録が、上述の如く、553年になって始めて現われたのであるが、これにはそれだけの理由があるように思われる。周書卷50吐谷渾伝は簡単ながら極めて暗示に富んだ記述を残している。上述の史寧の隊商襲撃事件の前に

大統中(535~549)、(吐谷渾)夸呂再び使を遣わして馬及び牛・羊等を獻ず。然れども寇抄止まず。縁辺多く其の害を被る。

とあり、さらにこれに続けて、

魏の廢帝二年(553)、太祖大兵を勅して姑臧に至る。夸呂震懼し、使を遣わして方物を貢す。とある。前文は吐谷渾の東魏遣使の極めて盛んであった時期に一致し、この時期に吐谷渾は、一面では西魏への遣使奉獻を続けながらその裏では縁辺地域をたえず侵害し、西魏も之を防止するだけの余

力がなかったことを示している。言いかえれば、吐谷渾は、北齊遣使を継続するため、西魏に対して遣使奉獻と辺境侵害の両面作戦をとりながら牽制していたのである。

然るに後文になると事態は一変している。即ち太祖（当時はまだ西魏の実権者宇文泰）は、大兵を指揮して河西の姑臧（＝武威）で軍事パレードを大々的に行ってその軍事力を誇示した。そのため、さすがの夸呂も脅威を感じ、あわてて西魏に遣使奉獻して恭順の意を表している⁽⁷⁾。しかもその直後に史寧による隊商襲撃事件が起きているのである。即ち、襲撃事件の前後、言いかえれば北齊成立後間もなく、西魏の吐谷渾に対する姿勢は、守勢から攻勢に転じたものと思わなければならない。それは、このころ、河南では洛陽以東、河北では平陽以東が遂に齊領となることによって東西兩魏の国境が漸く安定した感があって⁽⁸⁾、西魏における宇文泰の地位も次第に確固たるものになったためであろうし、このことはさらに554年の南朝梁の攻滅—その結果広大な四川を領土として支配することによって一層強化され、557年の北周政権の成立によって完成されていったものと考えられる。なお、附言するに、北周による四川の支配は、吐谷渾の南朝貿易の利を完全に奪い取ることとなり、その衰退を促進することにもなったのである⁽⁹⁾。以下、北周書本紀及び吐谷渾伝等によって両国関係の推移をたどってみることにする。

北周は政権樹立後、557年・559年に吐谷渾討伐を行ったが、特に557年は、件の史寧が突厥の木杆可汗の兵を合せて10万の大軍を以て領内深く侵入し、その有力な根拠地であった洮陽・洪和二城を攻略し、561年にはその地に洮州を新設して領土を西方へ拡張した。その故か両国は560年にはいると友好関係に入り、以後567年までほとんど毎年遣使奉獻が行なわれ、その間566年5月には、吐谷渾の南朝遣使の最重要地点たる龍涸の封王莫昌が多数の戸口を率いて内付したので、その地に扶州を新設しているほどである⁽¹⁰⁾。このような状態はその後575年まで続いたようであるが、以後再び不安定となり、576年には皇太子贇がその本拠地伏俟城⁽¹¹⁾まで侵入して多大の成果を収めて帰還している。ついで578年には1月及び12月と2回にわたって遣使朝貢し、翌579年には偽趙王他婁屯が来降したが、これを最後に朝獻は絶えた。

3 北齊と突厥

突厥が独立当初より中国との絹馬交易に熱意をもっていたことは、北史卷99西域伝突厥の条に

其の後を土門と曰う。部落稍盛なり。始めて塞上に至りて繒絮を市い、中国に通ぜんことを願う。とあることにより知りうる。そして西魏の実権者宇文泰もこのような動向に答えて使節を派遣した。前文に続けて、

西魏の大統十一年(545)、周文帝(後の宇文泰)、酒泉胡安諾槃陁を任せしむ。其の国皆相慶して曰く、「今大國の使至る。我が國將に與らんとするなり」と。十二年(546)土門遂に使を遣わして方物を獻ず。

とあり⁽¹²⁾、独立前10年も前から既に使節の交換まで行なっているのである。やがて555年、突厥は蠕蠕を亡ぼして独立し、新しくモンゴル高原の覇者となったが、このころよりさらに東の北齊との交易にも意欲を示しはじめた。独立の記事に続けて、

亦齊と使を通じて往来す。

と簡潔に述べている。今この前後の動きを北斉書本紀について見ると、果して554年8月及び555年2月と引続いて遣使奉獻のあったことを伝えている。

さて突厥の独立とその後の急速な膨脹は、北斉・北周にとって蠕蠕以上に新しい脅威となり、以後両国ともこれとの和平友好関係の維持に汲々たる有様であった。そのことは例えば560年の通婚政策に端的に表われている。

初め、恭帝の時(554～556)、俟斤(伊利可汗)、女を周文帝(宇文泰)に進めんことを許す。契、未だ定まらざるに周文崩ず(556)。尋いで俟斤又他女を以て武帝に許す。未だ結納に及ばざるに齊人亦婚を求め遣む。俟斤、其の幣の厚きを貪り、將に之を悔まんとす。是に至りて武帝詔して涼州刺史楊荐・武伯王慶等を遣わし往いて之を結ばしむ。慶等至る。諭すに信義を以てし、俟斤遂に齊使を絶ちて婚を定む⁽¹³⁾。

とある。突厥との友好関係持続のため両国は競って歳幣を厚くしたことがうかがえる。そして歳幣の主たるものは絹であり、この点では恐らく大産地齊・魯を擁する北斉が優位に立ったことはいうまでもなく⁽¹⁴⁾、上記のような経過となったに違いなからう。

ところでこの状態はその後も暫く続き、そのため両国に対する突厥の高姿勢はますます助長されることとなった。北史突厥伝は、続けて次のように述べている。

俟斤自り以来、其の国富強にして、中夏を凌陵するの志有り。朝廷既に之と和親し、歳ごとに縑絮・錦綵を給すること十萬段、突厥の京師に在る者、又待つに優禮を以てし、錦を衣、肉を食するもの常に千を以て數う。齊人其の寇掠を懼れ、亦府藏を傾け以て之に給す。他鉢(略可汗)彌復驕傲となり、乃ち其の徒屬に令して曰く、「但、我が在南の兩箇の児をして孝順ならしむれば、何ぞ物無きを憂えんや」と。

北周が歳ごとに縑絮・絹綵十萬段を贈ったのに対し、北斉はさらに府藏を傾けてこれに対抗したというのであるから、突厥に流入した錦綵の量は莫大なものであったに違いない。そしてこれらの絹は、突厥の王侯貴人の奢侈的需要や功臣に対する賜与等に向けられたことはいうまでもないが、さらに西方のササン朝ペルシャや東ローマ帝国にも積極的に輸出されたに違いない。そしてまた、この輸送・販売にあたったのは、当時東西交易で広く活躍し、しかも突厥独立以前から既に突厥社会に入り込んでいたソグドの商人である⁽¹⁵⁾。いま、60年代中ばの突厥の動きをみると、

566年 北斉へ遣使奉獻

567年 北斉及び北周へ遣使奉獻

568年 ペルシャ及び東ローマ帝国へ使節派遣。

東ローマ帝国の使節突厥に来る。

569年 北周へ遣使奉獻

とあり、公式に記録されたものだけでも毎年見られ、このころ歳幣のほかに遣使朝貢による交易が盛んであったことがうかがえる。さらに568年の事件は、漢文史料には見えないが、まことに特記すべき事件であり、こうした場合にソグド人が舞台裏でいかに重要な役割を演じていたかを知らうる殆ど唯一の例である。即ち、ビザンティン帝国の歴史家メナンドルの記述(Menandri Protectoris Frag-

menta)によると、大要次のように報じている⁽¹⁶⁾。

独立後間もない第一突厥帝国の西方領土を支配していたシルジブール可汗(イステミ可汗?)は、新しく支配下に入ったソグド人商人のマニアックを派遣してササン朝ペルシヤに絹の貿易を開こうとして拒絶された。そこで可汗は、再びマニアックを使者として、アラル海・カスピ海の北を迂回するコースをとってコンスタチノープルに東ローマ皇帝ユスティヌス皇帝を訪れさせ、絹貿易を申入れさせた。その結果、両国の間に絹取引を前提とする同盟が成立した。そこで東ローマ帝国から答礼使として將軍ゼマルコスの一団が突厥の王庭に派遣された。ゼマルコス一団は大いに歓待され、やがて帰途につくのであるが、その折再び可汗は別のソグド人(このときマニアックは死亡していた)に、マニアックの息子とともに同行させた。いずれもユスティヌス帝の第4年即ち568年のことである。

以上が事件の梗概であるが、この一連の作戦計画を舞台裏で立案し、可汗を動かしていたのが、他ならぬソグド商人であった。従って、突厥と北周・北齊との交渉においてもその背景には、やはりソグド人の活動があったことは想像に難くない。

なお、この事件で注意されることは、絹貿易に積極的であったのは突厥だけでなく、東ローマ帝国の方も、早く突厥勃興以前から極めて熱心に中国の絹を求めていた事実で、このことは既に宮崎市定氏が指摘されている⁽¹⁷⁾。

さて、かように突厥は北齊の絹を大量に西域諸国に運んだだけでなく、タリム盆地やソグディアナ地方の城郭国家に対する支配をしだいに強化していったのであるから、その中国遣使に際して、西域諸国使節や商人を帯同したのであろうことは想像に難くない。旧唐書卷29音楽2に、

周の武帝(560~578)、虜の女(突厥可汗^{イステミ}瑟帝米?の女と思われる)を聘して后と為す。西域の諸國来り賸す。是に於いて龜茲・疏勒・安國・康國の樂有り。

とあり、突厥の使節とともに西域諸国の使節が随行し来り、それぞれの国の伝統的音楽を伝えていることに注目したい。そしてこれは北周への遣使であるが、北齊への遣使の場合も同様であったと考えて間違いなからう。

以上、一、二、三の三つの場合について、東魏・北齊と西域諸国との交易の実態を追求し、特に一及び三の場合には、これに伴って西域胡人が東魏・北齊に来住・帰化したであろうことを推測した。

従って鄴都を中心として北齊領内で活躍した西域人は、既に北魏時代に来住帰化した者及びその子孫と東魏・北齊時代に来住した者とのいずれかであるが、その数はおよそどれほどに上ったのであろうか。この点について少しく触れてみたい。

さて、これら西域人たちは、中国に来住帰化してからも依然として、本国の宗教ゾロアスター教(妖教)の信仰を固く守っていたようである。隋書卷27百官志中に、

鴻臚寺は蕃客の朝會・吉凶弔祭を掌り、典客・典寺・司儀等の署の令・丞を統ぶ。典客署は、又京邑の薩甫二人、諸州の薩甫一人有り。

とある。薩甫は薩宝・薩保とも書き、本来隊商の長を意味するサンスクリット語 Sarthavahō を音写したもので、この場合は、ゾロアスター教徒を統轄するための役人である⁽¹⁸⁾。従ってこのような職掌がすでに北齊時代に設置されて鴻臚寺管下の典客署に属していたことは注目に値する。しかも、京邑

即ち鄴都内の信徒のために2人、諸州（勿論すべてではない）に各1人の薩甫を配置（もちろんゾロアスター教徒である胡人）して、中国に在住信徒に対する組織的な統轄が行われていたことは、信徒の数が無視できるほど少数ではなかったことを暗示しているように思われる⁽¹⁹⁾。

少しく降って隋代の薩甫について、通典巻40職官21の隋官品令を見ると「視正七品」の項の最後に「雍州薩保」の名があり、「視正八品」の中に「諸州胡二百戸以上薩保」と見える。そして通典の中には「京邑薩甫二人」に相当するものが見当たらないが、「雍州薩保」があるいはそれに当るのかも知れない。そしてそれ以上に注意を惹くものは、諸州の薩保は胡人200戸以上の州に設置されたという件りで、当時中国に在住した西域人が決して少なくないことを思わせるものである。

最後に北史巻92恩倖伝に、

武平の時（570～575）、胡小兒有り。俱に是れ康阿駄・穆叔兒等富家の子弟なり。黠慧なる者を簡選すること十數人、以て左右と爲し、恩眇出ずる処、殆ど闈官等と相等し。

と見える一節に注目したい。康阿駄（康国即ちサマルカンド人）・穆叔兒（穆国即ちウズベク・アムル人）らはいずれも西域出身の富商の子弟であり、しかもこのような階層からその子弟数十人を一度に召しかかえ得たということは、鄴都在住の富裕な胡商が相当数いなければ不可能なことで、これまた在住者の少からざることを推測せしめるものといえよう。

以上の事実からして、当時の在住西域人は戸数にして数百戸、従って人口にして数千人を下らなかったものと推定する。

二 北齊の政治と西域人——恩倖と忠臣

1 和士開

北齊書巻五十恩倖伝の本伝に

「其の者は西域の商胡、本の姓は素和氏」とあるから、国は特定できないが、西域出身の商人であることは明白である。中国へは少くとも父の代には来ておったはずで、父の安は、中書舎人に任ぜられ、高歡の献武王時代（540～47）には儀州刺史（山西省）に任ぜられ、漢人劉氏の女を娶っている。従って士開は、胡人ながら一応貴頭の出身ということになり⁽²⁰⁾、かつ生れつき聰慧であったから選ばれて国子学生となったが、生来の賢明さの故に同僚からも一目おかれる存在であったという。

ところが、天保元年（550）、のちの世祖武成帝が長広王に封ぜられるや、その府行参軍に選ばれ、これが政治の表舞台に登場する機縁となったのである。持ち前の気質と特技（握槊と胡琵琶⁽²¹⁾）で、いずれも長広王も好む）で深く取り入り、「殿下は天人に非ず、是れ天帝なり」とうまく持ち上げ、長広王また士開に対して「卿は世人に非ず、是れ世神なり」というほどの親密な関係になった。

その後、侍中・開府から右僕射に進むに従って阿諛追従は度をまし、君臣の礼なきままでに至った。そして遂に「古より帝王盡く灰燼となる。堯・舜・桀・紂も竟に何ぞ異ならん。陛下宜しく少壯に及べば、意を慾にして樂を作し、縦横に之を行ふべし。即ち是れ一日の快活、千年に敵せん。国事は大臣に分付し、何の慮か辨ぜざる、自ら勤苦するを爲す無かれ」とそそのかして有頂天にさせ、死の間際には世祖自ら士開の手を握って「我に負くこと勿れ」と遺言するほどであった。

次いで即位した(565)後主は、先帝の顧託をもって特に深く信任し、胡太后もまた士開を寵愛した。これから以後、専権ぶりは一層激しくなっていた模様である。本伝は次のように述べている。

河清・天統以後、威権轉た盛なり。富商大賈朝夕門を填め、朝士の廉恥を知らざる者多く相附會し、甚しき者は其の假子となる。

彼の被護と営業上の特権を引出さんがため、富裕な商人どもが蝟集してその門を叩き、破廉恥な朝士も阿諛追従にこれ努めた様子がかがわれる。このあとにくるのは、いうまでもなく売官の横行である。

売官の次は鬻獄である。これについても

士開、人の將に刑戮を加えられんとするを見、營救する所多し。既に罪を免るるを得るや、即ち命じて調諭して其の珍寶を責めしめ、之を贖命物と謂う。全濟有りて雖も皆直道に非ずと云う。とある。死刑囚から助命と引替えにその珍宝を喝取して蓄財に励むなど、悪業ぶりもまことに徹底したものであった。

このような横暴ぶりを見かねた趙郡王叡は、同志と相謀って士開を君側から地方に追い出すことを図った。このような動きを敏感に察知した和士開は秘かに機先を制しようと謀ってその機会を窺っていた。

武成崩ずるや(568)、尊んで皇太后と爲す。陸温及び和士開密かに趙郡王叡を殺し、婁定遠・高文遙を出して刺史と爲さんと謀る。和、陸(令萱)・(胡)太后に詔事し、至らざる所無し。とある。ところが士開が機を見出せないうちに趙郡王の側が先手を打つことになった。北齊書の彼の伝に

太后の朝貴を前殿に觴するに屬り、叡、士開の罪失を面陳して云う。「士開は先帝の弄臣、城狐社鼠なり。貨賄を受納し、宮掖を亂穢す。臣等義として口を杜ぐ無く、死を冒して以て陳べん」と。と口を極めて責め立てると、胡太后は

先帝の在りし時、王等何ぞ言わざりしや。今日孤寡を欺かんと欲するや。但、酒を飲み多く言う勿れ」

と反論し、両者の間に激しい応酬が戦わされたが、結局、翌日に至り、再び胡太后から

梓宮殯に在り、事は大いに忽速なり。王等の更に思量せんことを欲すの通達があつて一応決着はついた。

その後胡太后・段詔、宦官胡長鸞はさらに反対派の勢力を弱めるために士開とも語らつて切崩しを謀った。趙郡王の共鳴者であった婁定遠を贈賄工作(美女2人に珠簾・宝玩等を贈る)によって寝返らせ、最後には首謀者の趙郡王叡を不臣の罪で誅殺させた(569)。

このように奸智をもって第一の危機を斬り抜けた士開は、武平元年(570)淮陽王に封ぜられ、尚書令・録尚書事としていよいよ権力の中樞についた。これにより、彼の専横はとどまるところを知らず、遂に人臣の分を逸脱して胡太后との間にも人倫を踏みにじるという無軌道ぶりを発揮した。ここに再び、幼少より聰敏の誉れ高かった琅邪王儼(後主の弟)を中心として一派が弾劾に立ちあがり、571年7月ついに誅殺した。しかし、警戒心を強く抱いた後主とその意を受けた臣下の策謀により、今回も

首謀者の儼は死を賜わり、かえって士開の子の道盛は常得に、弟の士休は内省入りとなった。そして後主は士開の死を悼むこと深く、数日間内に閉じこもり政治を見なかったという⁽²²⁾。

後主の武平五年(574)、高思好(神武の従子上洛王思宗の養子)が挙兵したとき、并州の諸貴に与えた書の中で、後主朝の悪政を痛烈に批評したが、その一節に次の件りがある。

主上少くして深宮に長じ、未だ人の情偽を辨ぜず、凶狡に昵近し、忠良を疎遠す。遂に刀鋸刑餘をして軒階に貴溢し、商胡醜類をして權を帷幄に擅にし、生靈を剝削し、朝市を劫掠せしむ。

以上述べた和士開は、まさに「商胡の醜類」であり、その行状は、擅權以下の悪行を地で行ったものというべきである。

2 何海・何洪珍

この二人は「何」という姓からして出身は何国即ち現在のソ連領ウズベック共和国の Kushaniya である。しかし、いずれも専伝がないので、散見する史料より生涯をたどるよりほかない。

まず北齊書卷50恩倖伝によると

又何海及び何洪珍有り。皆王と爲り、尤も親要と爲る。

とあり、父子ともに王になったとある。来住外国人が何らかの特技などにより後主の親任をえて比較的容易に王になりえたのは北齊時代、それも560年代以降だから、来住の時期は北齊初めごろと推定してよからう。そして父の何海がどのような功績又は特殊な才能で王となったか史料がないので分らない。従って比較的史料の多い洪珍について述べる。

北齊書卷44儒林伝の張景仁伝に

胡人何洪珍、後主に寵有り。

とあり、どのような理由からか後主の寵を得ることになり、このことが政治の世界に係わることになった第一歩である。ついで同伝は、

朝士に通婚することを得んと欲し、景仁内官に在りて位稍高きを以て、遂に其の兄の子の爲に景仁の第二息子瑜の女を取る。此に因りて表裏し、恩遇日に隆なり。

とある。朝士の張景仁その人は、微賤の出ながら、能書という特殊な才能によって世宗・武成帝及び後主の恩遇を受け、太子門大夫・正常侍・諫議大夫(従4品)の位になった。従って洪珍としては恩寵だけに頼るのではなく、さらに漢人朝士との通婚により、その地位を一層強固にしようとしたのである。かくして彼は、通婚関係をより不動のものにするため、次のような手を打った。

まず、病氣勝ちの景仁の養生のため、格別の努力をしている。景仁伝に

景仁は疾多し。毎に徐之範等を遣わして治療せしめ、藥物珍羞を給し、中使の疾を問う者道に相望めり、是の後、有司に勅し宅に就いて御食を送らしむ。

とあり、正に至れり尽くせりの忠勤ぶりである。

次は景仁の子の就官についての助力である。景仁伝の末尾の部分に、

子瑜、薄く父の業を傳え、更に餘技無し。洪珍の故を以て中書舍人(正6品)に擢授せられ、給事黄門侍郎(正4品)に轉ず。長息子玉は員外散騎侍郎(従5品)より起家す。

にあり、張氏と何氏は、後主の恩寵を最大限に利用し、相寄り相扶けて宮廷における地歩を固めていっ

たのである⁽²³⁾。

景仁との通婚関係は、洪珍にさらに一人の支持者を得る幸運をもたらした。同じ儒林伝の張雕である。

胡人何洪珍、大いに主上の親寵を蒙り張景仁と婚媾を爲す。雕は景仁の宗室なるを以て自ら洪珍に託し、心を傾けて相禮し、情好日に密にして、公私の事、雕常に其の指南を爲す。

時に穆提婆・韓長鸞は、洪珍と共に帷幄に持し、雕の洪珍の謀主爲るを知り、甚だ之を忌悪す。洪珍又雕を監國史に奏す。

張雕は景仁と親戚関係にあり、つとに儒学を以て高祖神武帝の覇府に入り、天保中に永安王府参軍事、乾明中には国子博士から平原太守に転じた。世祖が即位するや(561)通直散騎侍郎(従5品)に除せられ、ついで涇州刺史をへて間もなく、散騎常侍(従3品)、侍読となって景仁とともに尊禮を被り、華光殿において春秋を講じたほどの学者で、その功により国子祭酒(従3品)、假儀同三司、侍詔文林舗を加除された。後述するように剛直の士であっただけに、初めは洪珍にはこよなきブレーンといってもよい人物である。(初めは、と限定したのは、後に張雕は洪珍から離れていったと考えられるからで、このことは後述する)

更にいま一人強力な人物との結びつきを図っていたようである。上述の和士開とである。和士開にはどのように接近したかは不明であるが、北齊書卷12武成十二王の琅邪王儼の中に和士開誅殺(571年7月)直後の動きとして

何洪珍は和士開と素より善し。亦、之(琅邪王儼)を殺さんと謂う。未だ決せず。食輿を以て密かに祖筵を迎えて之を問う。

と述べている。結局、祖筵を中心として進められた密謀により、儼は間もなく9月に14才で誅殺されるのであるが⁽²⁴⁾、洪珍が和士開の報復のために積極的に動いたことは極めて明白で、それだけ両者の結びつきも固かったことを裏書きしている。

さてその後(573年2月)における洪珍の動きについては、これを伝えるものがほとんどない。ただ推察しうるところは次のようになるろう。

何洪珍が結びつきをもった人物として、張景仁・張雕・和士開・穆提婆・韓長鸞の五名をあげてきたが、和士開・穆提婆・韓長鸞はいずれも恩倖伝にあげられて後主の君側の奸臣である。張景仁・張雕は姻戚関係にあるけれども、前者が恩寵の世界に生きる人物であるに対し、後者は学者であり、気骨溢れる剛直の士であった。従ってある時期までは洪珍の謀主でありえても、終生の支持者ではなかったと思われる。先に引用した張雕伝の一節に続けて次の文が見えるからである。

時に穆提婆・韓長鸞は、洪珍と共に帷幄に持し、雕の洪珍の謀主爲るを知り、甚だ之を忌悪す。

即ち洪珍の姿勢は、穆・韓のそれと同じであって、先に述べたような張雕の生き方ではない。その上、穆・韓の二人は、張雕の如き清廉の士を忌悪すること甚だしかったのであるから、洪珍としては保身のため張雕とは何時かは袂を別たねばならなかったはずである。その時期は意外に早かったといえる。和士開が誅殺(573.3)されて間もなく、崔季舒・劉逖・封孝琰らとともに、かれら二人の讒言にあって殺害されている⁽²⁵⁾。

そこで再び北齊書卷50恩倖の韓寶業伝に帰ると、

又何海及び洪珍有り、皆王と爲り、尤も親要と爲る。洪珍は権勢を侮弄し、獄を鬻ぎ官を賣る。とあり、彼もまた和士開らと同じく売官鬻獄の徒であったと記している。

また北齊書卷45顔之推伝中の「顔我生賦」の自注に

後主の宮に在るや、乃ち駱提婆の母陸氏をして之を爲さしむ。又胡人何洪珍等左右に在り。後皆政に預り國を亂す。

とある。当時北齊朝にあって文林館侍詔の地位であった顔之推の直接観察するところにより記したもので貴重な史料である。特に「何洪珍等」とあるが「三貴」⁽²⁶⁾といわれた高阿那肱・穆提婆・韓長鸞を凌いで、洪珍が特に権勢を擅にしたということは、北齊書を見る限り感じとれない。恐らく「三貴」に阿附してその地位を守るに汲々としたのではなかろうか。そして、最後については、三貴についてはかなり詳細な記載があるにも拘わらず、何も見当らない。

3 安吐根

安吐根については、拙論を前号で発表したので、それにより要点を摘記するにとどめる⁽²⁷⁾。

安国即ちボハラ出身の西域商人で、帰化四世として酒泉で生れた。若くして蠕蠕国に遣使されたが、不幸にして抑留の身となり、可汗阿那瓌の政策顧問として働く中、度々使節の随員として東魏を訪れ、献武王高歡の知遇をうけ、これが原因で再び東魏に投歸し、假設涼州刺史・率義侯となった。当時は蠕蠕との関係が深く、彼の知識と経験は貴重なものでやがて北齊朝下で重く用いられた。帰化四世で意識においても中国化していたと思われるし、また彼の性質にもよることと思うが、恩遇に報いるため忠臣としての道を歩んだ。武成帝・後主二代にわたる君側の奸和士開の専権を憎んで568年趙郡王叡に加担して彼の暗殺を凶ったが成功せず、叡は誅殺されたが、彼は免れ、引続き仕えた。576年北周軍の大挙侵入が始まるや、これと勇敢に戦い忠臣として最後を完うした（と思われる）。

三 胡商の活動

北齊朝は560年代にはいると恩倖の活躍がめだち、これと結託して商人の活動もさかんになった。このような風潮について北齊書卷50恩倖の和士開伝には、

河清・天統以後562～569年、富商大賈朝夕門を填め、朝士の廉恥を知らざる者相附会し、甚しき者は其の假子と爲り、市道の小人と與に同じく昆季の行列に在り。

とあり、同じく北齊書卷16の段榮伝には、

段孝言……（祖珽）出づる後に及び、孝言尚書右僕射と爲り、仍りて選舉を掌る。情を恣にして用捨し、請謁大に行わる。勅して京城の北隍を濬えしめ、孝言監作す。典作の日、別に置酒高會するに、諸人膝行跪伏して上壽を稱觴す。或いは自ら屈滯を陳べ、更に轉官を請う。孝言、意色揚揚として以て己が任と爲し、皆事に隨いて報答し、許して加授有り。富商大賈多く詮擢を被る。縦に人士を進用せ令むるに、咸是れ粗險放縱の流なり。

とある⁽²⁸⁾。ここに見える富商大賈はもちろん漢人が大部分を占めたことはいうまでもないが、中には西域出身の胡人の大賈も含まれていたに違いない。以下、若干の具体例についてその活動の一端を明

らかにしたい。

北齊書卷34楊愔伝に

大位（尚書令，正2品）に居りて自り，門に私交を絶ち，貨財を軽んじ，仁義を重んず。前後の賞賜，積みて巨萬を累ぬ。之を九族に散じ，架篋の中，唯書千卷有るのみ。

と，その清廉にして貨財に恬淡としていたことを述べた⁽²⁹⁾あとに，時世を憂えて密かに左右に洩らした言葉を次のように伝えている。

太保・平原王隆之，愔と宅を隣にす。愔，嘗て其の門を見るに富胡數人有り。左右に謂いて曰く，「我門前には幸いに此の物無し」と。性，周密にして畏れ慎しみ，恒に足らざるが若く，後命を聞く毎に愀然として色を變ず。

平原王隆之は高隆之のことで北齊書卷18に伝がある。それによると，高祖神武帝の創業の功臣でいくたの勲功をあげ，孫騰・高岳・司馬子如とともに「四貴」と呼ばれたほどの勲貴であったが，反面私欲も旺盛で収賄に関係して譴責を受けることも一再ではなかった⁽³⁰⁾。この点で「主上に昏くして政下に清し」と評された忠誠・清廉の楊愔とは全く対照的であり，従って利にかけては抜け目のない商人達にとっては，請託のこよなき目標であったに違いない。西域の商人たらが，時の権力者たる彼の所へ，さまざまな利権を求めて殺到したのも当然である。

同じく北齊書卷9后妃伝に，

武成の時（561～'65），胡後の爲に真珠の裙袴を造る。費す所稱して計うべからず。火を被りて焼かる。後主既に穆皇后を立て復爲に之を營まんとす。周武，太后の喪に遭うに屬り，侍中薛狐・康買等に詔して弔使と爲す。又商胡を遣わして錦綵三萬疋を齎らして弔使と同に往き，真珠を市いて皇后の爲に七寶車を造らんとす。周人，貿易に與せず。然り而して竟に焉を造る。

武成帝の豪華な宮廷生活の一端を物語るエピソードであるが，ここでも特に注意をひくのは，北周武帝が皇太后の葬儀のため弔使として薛狐・康買の二人を派遣したのであるが，後者の康買はその姓よりして康国即ちサマルカンド出身の胡人に相違ない。また真珠買付けのため弔使に随行させた商人たちは明確に「商胡」即ち西域胡人の一団である。しかも真珠の対貨として持って行った絹糸たるや実に3万疋という莫大な数量である。宮崎市定氏によると絹3000疋は，食封1000戸の封王の年収に相当するといふから⁽³¹⁾，3万疋は実に食封1万戸の封侯の1年分の収入にあたるのである。一人の皇后のためにこれだけの財を投じて惜しまない奢侈的乱脈ぶりには驚きのほかないが，他面これだけの大量の絹を比較的短時間の間に調達するのも大変なことと思われる。いかにして調達しえたか—もちろん租として絹を納入することも行われていたのだから，宮廷の在庫品も含まれようが，やはり有力な西域商人よりなる政商の組織的活動なくしてはできなかつたのではないだろうか。弔使の一人康買がサマルカンド人，それに随行したのがこれまた商胡というのも尤もなことと思われる。

また北齊書卷42盧潜伝に

盧潜，淮南に在ること十三年，任として軍民を統べ，大いに風績を樹て，甚だしく陳人の憚る所と爲る。陳主，其の邊將に書を與えて云う：「盧潜猶寿陽に在り。其れ何れにか當に北に還るべきと聞く。此の虜，死せずんば，方に國患と爲らん。卿，宜しく之に備えよ」と。顯祖，初めて淮南

を平ぐるや、十年の復を給せり。年満つるの後、天統・武平中（565～'75）に逮ぶや、徴税煩雜なり。又高元晦の政を執るや（572）、漁獵を斷ず。人家以て自ら資する無し。諸の商胡の官を負いて息を責むる者、宦者陳徳信、其の妄を縦にし、淮南の富家に注ぎ、州県をして徴責せしむ。又勅して突厥の馬數千疋を揚州の管内に送り、土豪をして貴く之を買わしめ、錢直始めて入るや、勅を出して江・淮の馬を括り、並びに宦厩に送らしむ。是に由りて百姓騷擾し、切齒して嗟怨す。潛、事に隨いて撫慰し、兼ねて權略を行う。故に寧靜なるを得たり。

とある。天統、武平中とあり、「高德政政を執るや（572）」とあるにより、これは後主の時代のことである。即ち、陳との国境紛争の後、新しく支配地となった淮南の地における事件である。長年の抗争により疲弊した同地区に10年の優復を与えて、民力の回復を図ったまではよいが、その期限がすぎると忽ち徴求が始まったのである。特に注目されるのは、胡商たちの暗躍である。漁獵の道まで断たれて生活に苦しむ零細農民に対して生活資金の貸付けを行っていたようである。そして彼等胡商たちは、宦者の陳徳信と結託したうえ、官権をカサにきて假借なく利息の督促をしたり、富裕な家に対しては、勝手に妄（具体的内容は分らない）を働くなどの横暴を働いている。また突厥から輸入した宦馬数千頭を管内の土豪に高く買いとらせるだけでなく、買取り代金はいるや、またまた江淮の馬を検括して政府の厩に送り込ませるなど、宦権自らが詐欺的行為を行ないながら、恬として恥じない。これに怒った民衆の騷動が大きくなると、軍・民両権を持った地方官が、最後は公権力をカサにきて泣寝入りさせる暴挙を行っているのである。恐らくは、胡商たちが何らかの形で一役買っていたのではないかと想像される。

三 その他の分野

1 (1)音楽・舞踊

文宣帝洋は、既に宮崎市定氏も指摘された如く⁽³²⁾、自らは胡族の血を引く身でありながら、鮮卑人よりも漢人・西域人を多く採用した。わけても後主緯は、西域マニアともいべき性向があつて、西域の音楽その他に殊のほか強い関心と愛着を抱いていた。例えば、曹国出身の胡小兒曹僧奴の女を後宮に入れて昭儀とし⁽³³⁾、自分の愛馬にはきまつて罽賓国(Kashmir)産の毛織物の飾衣裳をつけさせ、胡小兒といって富裕な西域人の子弟を一時に数十人も選んでさまざまな用にあたらせていた。いま史書の記載によってその一端を伺ってみる。

北齊書卷50韓寶業伝に

又史醜多の徒・胡小兒等数十人有り。咸、舞を能くし、歌に工なり。皆、儀同に至り府を開き、王に封ぜらる。胡小兒等、眼鼻深險にして一も用う可き無きなり。

とあり、心ある漢人士からは、「西域の醜胡・龜茲の雜技」⁽³⁴⁾と蔑まれながらも、後主の恩寵を盾に王に封ぜられ、府を開くことを許されるという乱脈ぶりであった。

また、当の後主について、通典卷142楽二は、

後主は唯、胡戎の樂を賞し、耽愛已むこと無し。是に於いて淫聲を繁習し、新を争いて哀怒す。故に曹妙達・安未弱・安馬駒の徒、王に封ぜられ、府を開く者有るに至り、遂に簪纓を服して伶人

の事を爲せり。

と、その西域楽に対する感溺ぶりを伝えている。

(2) 寵胡

北齊書卷12武成十二王の綽の伝に、

綽、是に由りて大いに後主の寵と爲り、大將軍に拜せられ、朝夕同に戯る。韓長鸞之を問て、齊州刺史に除せらる。將に發たんとするに、長鸞、綽の親信をして其の反を誣告せしめ、奏して云う。

「此れ國法を犯すなり。赦すべからず」と。後主、顯戮するに忍びず、寵胡何猥薩をして綽と相撲せしめ、之を搦殺す。

と見える。皇帝・皇子の周辺には、力自慢の胡人がいて、彼等を慰めるために相撲その他の雑技（それは多く西域伝来のもの）を以て奉仕する胡人があまたいたものと考えられる。

また、北齊書卷9元後の条に

文襄敬皇后元氏は、魏の孝静帝の姉となり。孝武帝の時、馮翊公主に封ぜられて文襄に歸す。容徳兼美にして曲に私教を盡くす。……天保六年(555)に及び、文宣漸く昏狂を致す。乃ち居を高陽の宅に移し、其の府庫を取る。曰く、吾兄昔我が婦を姦す。我今須らく報ゆべし」と。乃ち后を淫す。其の高氏の女婦は親疎と無く、皆左右をして之の前に亂交せしむ。葛を以て絙と爲し、魏安徳王に令して上に騎り、人をして之を推引せしむ。又、胡人に命じて之を苦辱せしむ。帝、又自ら呈露し、以て羣下に示す。

とある。何とも引用も憚られる光景であるが、貴人に近侍する胡人のいたことが分る。

(3) 軍事

陳書卷31蕭摩訶伝に

太建五年(573)、衆軍北伐す。摩訶、都督吳明徹に随いて江を濟りて秦郡を攻む。時に齊、大將尉破胡等をして衆十萬を率いて來り援く。其の前隊に「蒼頭」・「犀角」・「大力」の號有り。皆身長八尺、膂力絶倫にして其の鋒甚だ鋭し。又、西域胡有り。弓矢に妙にして弦に虚發無し。衆軍尤も憚る。……

とあり、北齊軍の前鋒隊を構成する精鋭の中に恐るべき胡人の弓の名手がいたことが分る。恐らく相当数の胡兵が兵士として北齊軍の中にいたものと想像される。

(4) 俗信

北齊書卷9武成皇后胡後の伝に、

武成皇后胡氏は、安定の胡延の女なり。其の母は范陽盧道約の女なり。初めて懷孕するや、胡僧有り門に詣りて曰く、「此の宅の瓠蘆中に月有り」と。既にして后を生む。

とある。当時の胡の用法からしてゾロアスター教の僧侶即ちマジ(穆護)であろう。前述の如く、ゾロアスター教が信仰されていた以上、その僧侶が相当数いたことは当然であるが、マジは布教のかたわら、暦法、医薬などのほか、呪法も行っていたことが知られている⁽³⁵⁾。呪法者として貴人や庶民と接触していた一面も伺えて面白い。

結 語

以上により一応次の四点を明らかにしえたつもりである。

- (1) 北魏王朝の東西分裂により、東魏は西域諸国との直接交易を西魏により分断される態勢になったが、吐谷渾を仲介者として柔然経由の北方迂回コースにより、少なくとも553年に到る10数年間は、依然として交易が継続されていたこと。
- (2) (1)の関係を補強するため、東魏と吐谷渾との間には、王女の相互交換が行なわれ、西魏の頭越しに、友好関係を維持するための努力が積極的に行なわれたこと。
- (3) 553年以後は、北魏・北周の政権安定、国力伸張と、それに伴う吐谷渾の勢力後退により、吐谷渾を仲介とする西域諸国との交易は後退した。しかし、柔然に代る突厥のめざましい西方発展により、タリム盆地の城郭国家及びソグディアナ地方がその支配下にはいることにより、ソグド商人の突厥進出を促がし、かれらの暗躍による突厥の東ローマ帝国への絹の輸出を盛んならしめた。その結果、絹の原産地たる北齊は突厥を媒介として西域諸国との交流をある程度継続しえたものと考えられること。
- (4) 北齊朝下におけるソグド系西域人の活躍は、北魏時代における多数の西域人の洛陽来住および(1)、(3)の關係のほか、特に後主高緯のマニア的西域志向により、数多くの西域人を身边に奉仕させることになり、ために胡族出身の佞臣による政治の退廃をもたらすとともに、胡人政商の暗躍を容易ならしめたこと。

註

- (1) 桑原隲藏：「隋唐時代に支那に來住した西域人に就いて」内藤博士
還曆祝賀「支那学論叢」 1926 「東洋文明史論叢」所収
(P.P.277~404)

向達：「唐代長安與西域文明」(P.P.1~117) 1933

姚薇元：「北朝胡姓考」(P.P.371~399) 1958

陳寅恪：「隋唐制度淵源略論稿」(P.P.43~44)

28人の内訳は次のとおり。

1. 龜茲国 (Kutcha)	4
2. 月氏国 (実は Tokhara)	1
3. 康国 (Samarkand)	3
4. 史国 (Kesh)	1
5. 曹国 (Kabudhān)	5
6. 安国 (Bokhara)	7
7. 何国 (Kushanya)	5
8. 婁国 (Āmul)	1
9. 不明	1

後述する康買・康德注を入れると30人中の18人となる。また、中央アジアのソグディアナ出身者が大部分を占めていることが注意される。

- (2) 「武定三年(545)二月庚申、吐谷渾国奉其從妹備後庭。納為容華嬪。」(魏書卷12孝靜帝紀)
- (3) 最後の天保4年(553)は、同年におこった西魏の涼州刺史史寧による吐谷渾使節団の襲撃事件(後述)があったことにより、吐谷渾の北齊遣使のあったことを知るのであるが、本紀にはその記載はない。なお、553年はすでに北齊時

代にはいつているが、吐谷渾の東魏遣使を考える場合には、本文に後述するように一つの時期として取扱う方が適当であると考えられる。

- (4) 「吐谷渾遣使考」(上・下) 史学雑誌第48編 11・12号 1937
- (5) 洛陽伽藍記卷三に次のように記されている。
自葱嶺巴西，至於大秦，百国千城，莫不款附。商胡販客，日奔塞下。所謂盡天地之區已。樂中國土風，因而宅者，不可勝數。是以附化之民，萬有餘家。門巷修整，閭閻填列。青槐蔭陌，綠柳垂庭。天下難得之貨，咸悉在焉。
- (6) 陳寅恪：「隋唐制度淵源略稿」二禮儀 1963
- (7) 北周書卷2本紀魏廢帝二年夏四月の条に
太祖勒銳騎三萬西踰隴，度金城河，至姑藏。吐谷渾震懼，遣使獻奉物。
とある。しかし、襲撃事件とはいずれが前後なるか分らない。
- (8) 北周書卷2文帝下大統十六年の条に，次のようにある。
於是河南自洛陽，河北自平陽以東，遂入於齊矣。
- (9) 後藤勝：「吐谷渾に関する二・三の問題」P.P.33~34. 史潮58号 1955
- (10) 後藤勝：前掲論文 P.P.32~33
- (11) 黄盛璋・方永：「吐谷渾故都—伏俟城発見記」考古学第8期 P.P.436~440
- (12) 後藤勝：「西域胡安氏の漢化過程」P.40 研究彙報7号 岐阜県高等学校社会科研究会 1968
- (13) 孝閔帝踐作，除御伯大夫，追爵姚谷縣公。仍使突厥結婚。突厥可汗弟地頭可汗阿史那庫頭居東面，與齊通和，說其兄欲背先約。計謀已定，將以荐等逆齊。荐知其意，乃正色責之，辭氣慷慨，涕泗橫流，可汗慘然良久曰，幸無所疑，當共平東賊，然後發遣我女。乃令荐先報命。仍請東討。以奉使稱旨，遷大將軍。保定四年(564)，又納幣於突厥。……從陳公純等逆女於突厥，進爵南安郡公。(周書卷33 楊荐伝)
- (14) 佐藤武敏：「中国古代の絹織物業の経営形態」集刊東洋学4，1960 「中国古代工業史の研究」所収
武仙卿「魏晉南北朝經濟史」宇都宮・増村訳(P.P.131~132) 1942
佐藤圭四郎：「北魏時代における東西交渉」松田寿男博士頌壽記念「東西文化交流史」所収(P.P.378~391) 1975
北齊時代における絹の生産に関する史料は極めて乏しいが，隋書卷27百官志によると大府寺が官府工業を管理し，その下に中尚方が定州紬綾局を統轄して絹の生産に当たっていたことが分る。さらに絹の需要増大に伴って官府工場のほか，農村においても前代より一層盛んになったと想像される。畢義雲は役人の身分にありながら家に十余台の織機を備えていたし(北史卷97，太平御覽卷816布帛部2)，祖珽は若い頃，遊び友達を家に招いて山東の大文綾，連珠孔雀羅等100余匹を賭けて樗蒲(ばくち)をさせて遊んだし(北齊書卷39)，中央大官が地方を巡省したときに地方官が白紬を贈って戒められた話(北史卷47袁律脩，太平御覽卷816布帛部2)，地方官が善政を施して中央に榮転する折，治下の民衆が絹を贈ろうとしたところ受取らなかった話など，絹の生産・流通の盛んであったことを裏書きしているものといえる。
- (15) 護雅夫：「東突厥国家内部の胡人」P.6~7 古代学第12卷21号。
- (16) 内藤みどり：「東ローマと突厥との交渉に関する史料—Menandri Protectoris Fragmenta 訳注」遊牧社会史研究 第22 1963
内藤みどり：「西突厥の西方発展と東ローマへの道」松田寿男博士頌壽記念「東西文化交流史」所収(P.P.148~170) 1975。
内田吟風 「西突厥初世史の研究」研究33・36・46号 1964~70
- (17) 「九品官人法の研究」P.487
- (18) 藤田豊八：「東西交渉史の研究 西域篇」所収「西域研究四 薩寶につきて」P.P.279~307 1932
- (19) 北周にも勿論ゾロアスター教がはいつていた。
後周欲招来西域。又有拜胡天制。皇帝親焉。其儀並夷俗。(隋書卷7禮儀志)
(安難陀)出身安國。後魏安難陀。至孫盤婆羅。代居涼州為薩寶。生興貴。執李軌送京師。以功拜右武衛大將軍・歸公。(元和姓纂卷四)
ほぼ同様な記事が新唐書卷75宰相世系表にある。
- (20) 宇都宮清吉訳「顔氏家訓」(平凡社世界古典文学大系)では，「西域出身の胡商の出で，宮中に入出入りする雑人群から，阿諛と詐欺で身を起した奸物」(P.410の注一)とされているが，筆者のように考えてよいのではなからうか。
- (21) 握槊と胡琵琶は，当時宮廷・官人層の間に広く愛好されていた。前者については，和士開のほか恩倖の韓鳳らも愛好

した。

又有浮陽高光宗善柺蒲。趙國李幼序・洛陽丘何奴並工握槊。此蓋胡戲，近入中國。云胡王有一人，遇罪，將殺之。弟從獄中為此戲以上之。意言孤則易死也。世宗（499～415）以後，大盛於時。（魏書卷91術藝蔣少游）とあって、北魏の中頃5C初めに既に中国に伝わっていた。北齊においては、後主・和士開のほか恩倖の韓鳳らも愛好した。殊に北齊の滅亡の直前、周軍の猛攻の前に北齊軍は総崩れとなり、敗報相ついで至る中で側近の奸臣が握槊に興じていたことを報じた韓鳳伝（北齊書卷50恩倖）の記事は驚きの他にない。

壽陽陥没、鳳與穆提婆聞告敗，握槊不輟曰：「他家物，從此去」。後帝使於黎陽臨河築城戍，曰：「急時且守此作龜茲國子，更可憐人生如寄，唯當行樂，何因愁爲」。君臣應和若此。

後者は、龜茲琵琶*とも称される五弦の琵琶で西域楽の主流をなす龜茲楽の主要楽器で、魏収・祖珽らも得意としたことが夫々の伝に見える。

*岸辺茂雄「東洋の楽器とその歴史」P.205, P.240 1943

(22) 谷川道雄：「隋唐帝国形成史論」P.276～278

(23) 宇都宮清吉前掲書P.591の注四に次のようにある。

儒林伝に（張景仁の）本伝があるのは史家の御愛敬だが、その末尾の句がふるっている。「蒼頡以来、いろいろの書体が工みだというだけで出世したのはこの男唯一人だけ。醜怪な宮廷勢力群の背景のもとに文林館の事業にも緊密な関係をもったらしい云々」

(24) 顔氏家訓第二教子篇には、儼が幼少より賢明であったことを次のように伝えている。

齊武成帝子瑯琊王，太子母弟也。生而聰慧。（武成）帝及（胡太）后並篤愛之。衣服飲食與東宮相準。帝每面稱之曰，此點兒也。富有所成。及太子即位，王居別宮，禮數優僭，不與諸王等，（胡）太后猶謂不足，常以為言。年十許歲，驕恣無節，器服玩好，心擬乘輿，嘗朝南殿，見典御進新水，鈎盾獻早李，還索不得，遂大怒，曰，至尊已有，我何意無。不知分齊。率皆如此。識者多有叔段，州吁之譏。後嫌宰相（和士開），遂矯詔斬之。又懼有救，乃勒麾下軍士，防守殿門，既無反心。受勞而罷。後竟坐此幽薨。

(25) 北齊書卷44儒林伝に次のようにある。

「……伏願陛下珍寶金玉，開發神明，數引賈誼之倫，論說治道，令聽覽之間，無所擁蔽，則臣雖死之曰，猶生之年」歔歔流涕，俯而就戮。侍衛左右莫不憐而壯之。時年五十五。

(26) 北齊書卷50恩倖の韓鳳伝に次のようにある。

後主即位，累遷侍中・領軍，總知內省機密。……軍國要密，無不經手，與高阿那肱・穆提婆共處衡軸，號三貴，損國害政，日月滋甚。

(27) 拙稿：「ソグド系帰化人安吐根について—西域帰化人研究その3」聖徳学園岐阜教育大学紀要16集 1988

(28) 富商大賈の官界進出については、北齊書卷10襄城景王濟の伝に

齊氏諸王選國臣府佐，多取富商・羣小鷹犬少年，唯襄城・廣寧・蘭陵王等頗引文藝清識之士，當時以此稱也。

(29) 楊愔の清廉ぶりについて本伝に次のようにある。

重義轉財，前後賜與，多散之親族，群從弟姪十數人，並侍而舉火。頻遭屯厄，冒履艱危，一殮之患，酬答必重。性命之讐，捨而不問。

なお、楊愔については、次の二著にも優れた考察がある。

竹田龍児：「門閥としての弘農楊氏について」史学第31巻第1～第4号 P.635～636

谷川道雄：「隋唐帝国形成史論」（P.274, 315）

なお、竹田論文の636頁の3行目「数十巻」は「千」の、4行目「内外」は「門」の誤写である。

(30) 高隆之の取賄については次の2件があげられる。

使還（聘梁使主王昕及び副魏収）。尚書右僕射高隆之求南貨於昕・収，不能如志。遂諷御史中尉高仲密禁止昕・収於其臺。久之得釋。（北齊書卷37魏収）

武定中（543～550），爲河北括戸大使。……追還，拜太子太師。兼尚書左僕射・吏部尚書，遷太保。時世宗作宰，風俗肅清。隆之時有受納，世宗於尚書省大加責辱。（北齊書卷18高隆之）

なお、前者は東魏創業の頃で、齊・梁間に友好和平が回復された頃のことである（539）。

(31) 宮崎市定氏は「九品官人法の研究」の中で、北魏時代の封建諸侯の上位者の収入を述べた中で、夏侯道遷（魏書卷71）が豊県開國侯に封ぜられ、邑1000戸を食み、国秩蔵入絹3000余匹あったとされている。（同書P.449～450）

- (32) 宮崎市定：「東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社会」P.119
- (33) 向達：前掲論文 P.19 ただし、出典は明らかでない。
- (34) 北斎書巻50恩倅伝の序。
- (35) 藤田豊八：前掲論文